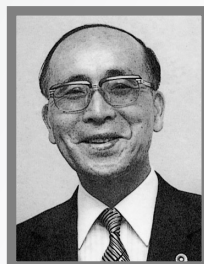


追悼

敬愛の次郎先生逝く

—— 渡邊次郎先生追悼記

会員 岡田 正美



故 渡邊次郎 会員
2006年7月23日ご逝去・82歳
1968年度東京弁護士会副会長

渡邊先生は、2006年7月23日、忽然と私の目の前から姿を消してしまった。82歳だった。まだまだ元気になっておられると思っていたのに、全くの驚きであった。最近は大変なご無沙汰であったので、惜別の念に耐えないところである。誰からも次郎さん次郎さんと親しまれていた。

先生は、私の同郷茨城の先輩で、何かと面倒をみていただいた。殊の外忘れられないのは、私が、1973年の東弁副会長選挙に立候補したときである。昼夜を分かたず文字通り献身的な応援をいただき激戦の中を無事当選できたことを鮮明に覚えている。当時の選挙は、今とは違い大変なもので、選挙情報に疎い私にとっては百万の味方であった。

先生は、弁護士会、裁判所調停協会等で大変な活躍がされていた。私が今でも忘れられないのは、私が東弁の副会長であった1973年に札幌で日弁連人権擁護大会が行

なわれたときである。先生は、当時、日弁連の人権擁護委員会副委員長で、大会を仕切っていた。そのときの市内観光の際に先生の奥様共々羊ヶ丘の「バーベキュー」で談笑したことが忘れられない思い出となっている。

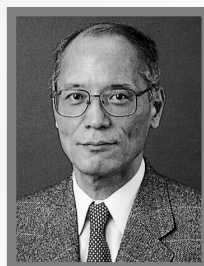
先生は、東弁副会長、日弁連常務理事などを歴任されたが、最も専念されたのは、裁判所調停協会であった。日本調停協会連合会の理事長を務められたが、その功績により、1996年に勲三等瑞宝章の栄誉に輝いた。

先生は、お子様に恵まれ、長男は一橋大学教授、長女の夫は埼玉大学の教授と聞いている。最近、弁護士会、裁判所などで先生の姿を見掛けなくなっていたので、気にかけていたけれども、まさかこんなに早く旅立たれるとは、夢にも思わなかっただけに、訃報に接したときは、驚きを禁じ得なかった。82歳とは、まだまだ、元気な年齢なのに誠に残念であり、もう一度会いたかったというのが実感である。合掌。

有さんを偲ぶ

—— 有正二郎会員との思い出

会員 竹之内 明



故 有正二郎 会員
2006年8月18日ご逝去・57歳
2002年度東京弁護士会副会長

伊礼勇吉会長の下で2002年度の副会長を務められた有正さんが、膵臓癌の病魔に冒され、57歳の若さで生涯を閉じられた。共に副会長を務めた者の1人として、「有さん」と過ごしたあのころの楽しい日々を思い起こし、有さんを偲びたい。

有さんは、仕事の面では労働事件などを多く手掛ける一方、弁護士会では司法制度改革に熱心に取り組んでこられた。市民の司法という揺るぎない観点に立ちつつ、リアリストとして、先々を見据えながら、目配り、心配りをしながら、合意の形成と運動の発展に尽力された。

これらの面での活躍はよく知られている。

この有さんの表の顔からすれば意外なことであろうが、われわれの知る彼の素顔は、無邪気で稚気にあふれ、それでいて、それ故に死期を早めたのかとも思うが、およそ健康などには無頓着な無頼派であった。お互いに、素顔をさらし、いわば遅まきながらの青春時代を共に過ごしたように思う。

有さんは、酒をこよなく愛した。そして、楽しい酒であった。当時の理事者は、例外なく酒好きで、夜毎に酒盛りをし、憂さを晴らしていたが、最初に酔っぱらうの

が有さん。何と彼は、キス魔で（ただし、男に対してのみ。何度キスされたことか）、電話魔（見境なく、同僚の自宅に電話する）であった。

有さんは、愛煙家でもあった。理事会が始まって1時間もたつと、有さんが、いつの間にかいなくなる。すると、めざとく見つけた私を含む愛煙家の3人が追隨する。これに非喫煙派も加わり、トイレ脇で理事会が続く、ここで重要事項が決定されることもしばしばだった。夕方になって、事務局が帰ると、有さんは、紙コップを灰

皿にして隠れタバコをする。証拠の隠滅を忘れて、翌日、秘書課の職員に叱られたりしていた。

麻雀好き、風呂好き、ダジャレ好き、医者・歯医者嫌いの有さん。そして、カラオケは聴いたことがなかったが、「音楽の友」にコラムを持っていた程のクラシック評論家としての有さん。次々に思い出が蘇る。キスはともかくとして、もう一度、有さんとあの楽しい酒が飲みたいと心から思う。ご冥福を祈りたい。献杯。